

シンポジウム・骨肉腫の診断と治療のトピックス

緒言／骨肉腫医学の明日へ向けて

富田 勝郎*

骨肉腫は長年、数多い骨腫瘍の中の王者としてその地位を確保し、他の多くの骨腫瘍の「診断と治療」の指針となるべく、最先端を走ってきた。私自身もこの領域に引きずり込まれてから20年余りの間、骨肉腫と闘う整形外科腫瘍医の姿を見続け、いつの間にかその渦に巻き込まれながら骨肉腫の制圧を夢見てきた。しかし知恵のあらん限りを尽くしても全く何事もなかったかのように平然と頭を持ち上げてくる再発・転移の執拗さに、これまで何度打ちのめされ、虚無感にとらわれ、投げ出し、また気を取り直してきたことであろう。骨肉腫は歯が立たないしろものではない。いずれの手段にもそれなりに反応をみせてくれる。が、その限りなく執拗なしたたかさに恐れをなしてしまう「ばけもの」なのである。

診断するや即切断するのがスタンダードであった20年前(1976年)、留学先のバッファローでの Prof. Sutow WW の講演で、当時の白血病治療の500倍の抗癌剤を用いるという、気違いじみていて信じられないような「high-dose methotrexate 化学療法」で、骨肉腫の肺転移が消えてしまったという症例を見せられたときの鳥肌立った思いも、今では私一人の懐かしい思い出となってしまった。今や抗癌剤の有効性を疑問視するものはいない。

また16年前(1981年)、Mayo Clinic で初めて患肢温存学会が開かれた時には、骨肉腫は四肢切断から広範囲切除へと、また新しい大きな一歩を踏み出したのだ、と体の芯で実感したものである。以後その旋風は世界中に及び、患肢温存がテーマとなっていたときの熱っぽい学会場の雰囲気は、自分の青春とオーバーラップして今思い出しても興奮する。

しかしこの10年、私の感受性が落ちてしまったのだろうか。骨肉腫に関して刮目するような大きなうねりを実感しない。あまりに豊富な情報が即時に飛び交いすぎて、それに目を奪われて見失っているののだろうか。即ち、小刻みな振幅が積み重なって、いつの間にか大きなうねりになっていることに気づいていないののだろうか。それともこの分野であのようなフィーバーはもう起こらないののだろうか。はたまた私自身が骨肉腫との闘いに疲れてきたのか、慣れあいになってしまったのか。とにかく情性的な行き詰まりみたいなものを感じ

* 金沢大学医学部整形外科

シンポジウム・骨肉腫の診断と治療のトピックス

ている。しかし、大局的な歴史の流れからみれば、いつの世も常に医学は進歩し続けているはずであり、骨肉腫の医学も個人的なセンチメンタルな感情をよそに確実に進歩し続けているのであろう。

そんな思いを抱きながら昨年の学会を聴いていて、骨肉腫医学にとってひょっとすると大きなうねりの前触れを示しているのかもしれない、と感じた演題のいくつかをここに取り上げさせていただいた。もちろんこのほかにもっとすばらしい基礎研究発表もあったが、臨床的に理解できるものととどめた。骨肉腫の診断治療は実際行き詰まっているように思う。しかし、この特集の中に明日への起爆剤が仕込まれているかもしれない。これらの中から新しいフィーバーがまきおこってくことを願っている。